

# 基石を呑んだ八っちゃん

有島武郎

青空文庫



八つちゃんやが黒い石も白い石もみんなひとりひとりで両手でとって、股ももの下に入れてしまおうとするから、僕は怒ってやったんだ。

「八つちゃんそれは僕んだよ」

といつても、八つちゃんは眼めばかりくりくりさせて、僕の石までひったくりつづけるから、僕は構わずに取りかえしてやった。そうしたら八つちゃんが生意気に僕の頬ほっぺたをひつかいた。お母さんがいくら八つちゃんは弟だから可愛かあいがるんだと仰おっしゃ有あったって、八つちゃんが頬ほぺたをひつかけば僕だつて口惜くやしいから僕も力まかせに八つちゃんの小つぼけな鼻の所をひつかいてやった。指の先きが眼にさわった時には、ひつかきながらもちよつと心配だった。ひつかいたらすぐ泣くだろうと思った。そうしたらいい気持ちだろうと思つてひつかいてやった。八つちゃんは泣かないで僕にかかつて来た。投げ出していた足を折りまげて尻しりを浮かして、両手をひつかく形にして、黙つたままでかかつて来たから、僕はすきをねらつてもう一度八つちゃんの団子鼻の所をひつかいてやった。そうしたら八つちゃんは暫しばらく顔かお中しゅうを変かちくりんにしていたが、いきなり尻しりをどんとついて僕の胸の所がどきんとするような大きな声で泣き出した。

僕はいい気味で、もう一つ八っちゃんの頬ぺたをなぐりつけておいて、八っちゃんの足あし許しよにころげている碁石ごいしを大急ぎでひったくってやった。そうしたら部屋のむこうに日なたぼっこしながら衣物きものを縫ぬいっていた婆ばあやが、眼鏡めがねをかけた顔をこちらに向けて、上眼うわめで睨にらみつけながら、

「また泣かせて、兄さん悪いじゃありませんか年かさのくせに」

といったが、八っちゃんが足をばたばたやつて死にそうに泣くものだから、いきなり立つて来て八っちゃんを抱かかき上げた。婆ばあやは八っちゃんにお乳を飲のみませているものだから、いつでも八っちゃんの加勢かせいをするんだ。そして、

「おおお可哀かあいそうに何処どこを。本当に悪い兄さんですね。あらこんなに眼の下を蚯蚓みみずばれにして兄さん、御免ごめんなさいと仰おつしや有あいます。仰おつしや有あらないとお母さんにいいつけますよ。さ」  
誰たれが八っちゃんのなかに御免ごめんなさいするもんか。始めつていえば八っちゃんが悪いんだ。  
僕は黙もくったままで婆ばあやを睨にらみつけてやった。

婆ばあやはわあわあ泣なく八っちゃんの脊中せちゆうを、抱かかいたまま平手ひらてでそつとたたきながら、八っちゃんをなだめたり、僕わがに何なにんだか小言こごとをいい続けていたが僕わががどうしても詫あやま詫あやまつてやらなかつたら、とうとう

「それじゃよう御座んす。八つちゃんあとで婆やがお母さんに皆んないいつけてあげますからね、もう泣くんじやありませんよ、いい子ね。八つちゃんは婆やの御秘蔵つ子。兄さんと遊ばずに婆やのそばにいらつしやい。いやな兄さんだこと」

といつて僕が大急ぎで一かたまりに集めた碁石の所に手を出して一掴み掴もうとした。僕は太急ぎで両手で蓋をしたけれども、婆やはかまわずに少しばかり石を拾って婆やの坐っている所に持つていつてしまった。

普段なら僕は婆やを追いかけて行つて、婆やが何んといつても、それを取りかえして来るんだけれども、八つちゃんの顔に蚯蚓ばれが出来ていると婆やのいったのが気がかりで、もしかするとお母さんにも叱られるだろうと思うと少し位碁石は取られても我慢する気になつた。何しろ八つちゃんよりはずつと沢山こつちに碁石があるんだから、僕は威張つていいと思つた。そして部屋の真中に陣どつて、その石を黒と白とに分けて畳の上に綺麗にならべ始めた。

八つちゃんは婆やの膝に抱かれながら、まだ口惜しそうに泣きつづけていた。婆やが乳をあてがつても呑もうとしなかつた。時々思い出しては大きな声を出した。しまいにはその泣声が少し気になり出して、僕は八つちゃんと喧嘩しなければよかつたなあと思ひ始め

た。さつき八っちゃんがにこにこ笑いながら小さな手に碁石を一杯握って、僕が入用なといったのも僕は思い出した。その小さな握拳が僕の眼の前でひよこりひよこりと動いた。

その中に婆やが畳の上に握っていた碁石をばらりと撒くと、泣きじやくりをしていた八っちゃんは急に泣きやんで、婆やの膝からすべり下りてそれをおもちやにし始めた。婆やはそれを見ると、

「そうそうそうやっておとなにお遊びなさいよ。婆やは八っちゃんのおちやんちゃんを急いで縫い上ますからね」

といいながら、せつせと縫物をはじめた。

僕はその時、白い石で兎を、黒い石で亀を作ろうとした。亀の方は出来たけれども、兎の方はあんまり大きく作ったので、片方の耳の先が足りなかった。もう十ほどあればうまく出来上るんだけど、八っちゃんが持つていってしまったんだから仕方がない。

「八っちゃん十だけ白い石くれない？」

とおうとしてふつと八っちゃんの方に顔を向けたが、縁側の方を向て碁石をおもちやにして八っちゃんを見たら、口をきくのが変になった。今喧嘩したばかりだから、僕

から何かいい出してはいけなかった。だから仕方なしに僕は兎をくずしてしまつて、もう少し小さく作りなおそうとした。でもそうすると亀の方が大きくなり過ぎて、兎が居眠りしないでも亀の方が駈かけつこに勝かちそうだった。だから困つちやつた。

僕はどうしても八つちゃんに足らない碁石をくれろといいたくなくなった。八つちゃんはまだ三つですぐ忘れるから、そういつたら先刻さつきのように丸い握拳さつきだけうんと手を延ばしてくれるかもしれないと思つた。

「八つちゃん」

といおうとして僕はその方を見た。

そうしたら八つちゃんは婆やお尻の所で遊んでいたが真赤まっかな顔になつて、眼に一杯涙をためて、口を大きく開いて、手と足を一生懸命にばたばたと動かしていた。僕は始め清せい正しょう公こう様さまにいるかったいの乞食こじきがお金かねをねだる真似まねをしているのかと思つた。それでもあのおしゃべりの八つちゃんが口をきかないのが変だった。おまけに見ていると、両手を口のところにもつて行つて、無理に口の中に入れようとしたりした。何んだかふざけているのではなく、本気の本気らしくなつて来た。しまいには眼を白くしたり黒くしたりして、げえげえと吐はきはじめた。

僕は気味が悪くなつて来た。八っちゃんが急に怖い病氣になつたんだと思い出した。僕は大きな声で、

「婆や……婆や……八っちゃんが病氣になつたよう」

と怒鳴どなつてしまった。そうしたら婆やはすぐ自分のお尻の方をふり向いたが、八っちゃんの肩に手をかけて自分の方に向けて、急に慌あわてて後うしろから八っちゃんを抱いて、

「あら八っちゃんどうしたんです。口をあけて御覽ごらんなさい。口をですよ。こつちを、明あかるい方を向いて……ああ碁石を呑んだじゃないの」

というと、握り拳をかためて、八っちゃんの脊中を続けさまにたたきつけた。

「さあ、かーつといつてお吐きなさい……それもう一度……どうしようねえ……八っちゃん、吐くんですよ」

婆やは八っちゃんをかつきり膝の上に抱き上げてまた脊中をたたいた。僕はいつ来たと知らぬ中うちに婆やの側に来て立つたままで八っちゃんの顔を見下みおろしていた。八っちゃんの顔は血が出るほど紅あかくなっていた。婆やはどもりながら、

「兄さんあなた、早くいって水を一杯……」

僕は皆まで聞かずに縁側に飛び出して台所の方に駈かけて行った。水を飲ませさえすれば



八つちゃんの病気はなおるにちがいないと思った。そうしたら婆やが後からまた呼びかけた。

「兄さん水は……早くお母さんの所にいつて、早く来て下さいと……」

僕は台所の方に行くのをやめて、今度は一生懸命でお茶の間の方に走った。

お母さんも障子を明けはなして日なたぼっこをしながら静かに縫物をしていらした。

その側で鉄瓶のお湯がいい音をたてて煮えていた。

僕にはそこがそんなに静かなのが変に思えた。八つちゃんの病気はもうなおっているのかも知れないと思った。けれども心の中は駄けっこをしている時見たいにどきんどきんして、うまく口がきけなかった。

「お母さん……お母さん……八つちゃんがね……こうやっているですよ……婆やが早く来てって」

といつて八つちゃんのしたとおりの真似を立ちながらして見せた。お母さんは少しだるそうな眼をして、にこにこしながら僕を見たが、僕を見ると急に二つに折っていた背中を真直になさった。

「八つちゃんがどうかしたの」

僕は一生懸命真面目まじめになつて、

「うん」

と思ひ切り頭を前の方にこくりとやつた。

「うん……八っちゃんがこうやつて……病氣になつたの」

僕はもう一度前と同じ真似をした。お母さんは僕を見て思はず笑おうとなさつたが、すぐ心配そうな顔になつて、大急ぎで頭にさしていた針を抜いて針さしにさして、慌あわてて立ち上つて、前かけの糸くずを両手ではたきながら、僕のあとから婆やのいる方に駈かけていらした。

「婆や……どうしたの」

お母さんは僕を押しよけて、婆やの側に来てこう仰おっしゃ有あつた。

「八っちゃんがあなた……碁石でもお呑のみになつたんでしようか……」

「お呑みになつたんでしようかもないもんじやないか」

お母さんの声は怒つた時の声だった。そしていきなり婆やからひつたくるように八っちゃんを抱き取つて、自分が苦しくつてたまらないような顔をしながら、ばたばた手足を動かしている八っちゃんをよく見ていらした。

「象牙のお箸を持つて参りましょうか……それで喉を撫でますと……」婆やがそういうかわぬに、

「刺がささつたんじやあるまいし……兄さんあなた早く行つて水を持っていらつしやい」と僕の方を御覧になつた。婆やはそれを聞くと立上つたが、僕は婆やが八っちゃんをそんなにしたように思つたし、用は僕がいつかつたのだから、婆やの走るのをつき抜けて台所に駈けつけた。けれども茶碗を探してそれに水を入れるのは婆やの方が早かつた。僕は口惜しくなつて婆やにかぶりついた。

「水は僕が持つてくんだい。お母さんは僕に水を……」

「それどころじゃありませんよ」

と婆やは怒つたような声を出して、僕がかかつて行くのを茶碗を持つていない方の手で振りはらつて、八っちゃんの方にいつてしまった。僕は婆やがあんなに力があるとは思わなかつた。僕は、

「僕だい僕だい水は僕が持つて行くんだい」

と泣きそうに怒つて追つかけたけれども、婆やがそれをお母さんの手に渡すまで婆やに追いつくことが出来なかつた。僕は婆やが水をこぼさないでそれほど早く駈けられるとは

思わなかった。

お母さんは婆やから茶碗を受取ると八っちゃんの口の所にもって行つた。半分ほど襟えりく頸びに水がこぼれたけれども、それでも八っちゃんは水が飲めた。八っちゃんはむせて、苦しがつて、両手で胸の所を引つかくようにした。懐ふところの所に僕がたたんでやつた「だまかし船ふね」が半分顔を出していた。僕は八っちゃんが本当に可愛そうでたまらなくなった。あんなに苦しめばきつと死ぬにちがいないと思つた。死んじやいけないけれどもきつと死ぬにちがいないと思つた。

今まで口惜しがっていた僕は急に悲しくなつた。お母さんの顔が真ま蒼さおで、手がぶるぶる震えて、八っちゃんの顔が真ま紅かで、ちつとも八っちゃんの顔みたいでないのを見たら、一人ぼっちになつてしまつたようで、我慢のしようもなく涙が出た。

お母さんは僕がべそをかき始めたのに気もつかないで、夢中になつて八っちゃんの世話をしていなかつた。婆ひややは膝ひざをついたなりで覗のぞきこむように、お母さんと八っちゃんの顔とのくつつき合っているのを見おろしていた。

その中うちに八っちゃんが胸にあてがつていた手を放して驚いたような顔をしたと思つたら、いきなりいつもの通りな大きな声を出してわーっと泣き出した。お母さんは夢中になつて

八つちゃんをだきすくめた。婆やはせきこんで、

「通りましたね、まあよかつたこと」

といった。きつと碁石がお腹なかの中にはいつてしまったのだろう。お母さんも少し安心なさったようだった。僕は泣きながらも、お母さんを見たら、その眼に涙が一杯たまっていた。

その時になってお母さんは急に思い出したように、婆やにお医者さんに駈けつけるようにと仰有った。婆やはびよこびよこと幾度いくども頭さげを下さげて、前まえ垂たれで、顔をふきふき立って行った。

泣きわめいている八つちゃんをあやしなから、お母さんはきつい眼をして、僕に早く碁石をしまえと仰有った。僕は叱しかられたような、悪いことをしていたような気がして、大急ぎで、碁石を白も黒もかまわず入れ物にしまってしまった。

八つちゃんは寢床の上にねかされた。どこも痛くはないと見えて、泣くのをよそうとしては、また急に何か思い出したようにわーっと泣き出した。そして、

「さあもういいのよ八つちゃん。どこも痛くはありませんわ。弱いことそんなに泣いちゃあ。かあちゃんがおさすりしてあげますからね、泣くんじやないの。……あの兄さん」

といつて僕を見なすつたが、僕がしくしくと泣いているのに気がつくど、

「まあ兄さんも弱虫ね」

といいながらお母さんも泣き出しなすつた。それなのに泣くのを僕に隠して泣かないよ  
うな風ふうをなさるんだ。

「兄さん泣いてなんぞいないで、お坐蒲団ざぶとんをここに一つ持って来て 頂戴ちやうだい」

と仰有つた。僕はお母さんが泣くので、泣くのを隠すので、なお八っちゃんが死ぬんでは  
ないかと心配になつてお母さんの仰有るとおりにしたら、ひよつとして八っちゃんが助  
かるんではないかと思つて、すぐ坐蒲団を取りに行つて来た。

お医者さんは、白い鬚ひげの方ではない、金縁きんぶちの眼がねをかけた方だった。その若い  
お医者さんが八っちゃんのお腹なかをさすつたり、手くびを握つたりしながら、心配そうな顔  
をしてお母さんと小さな声でお話をしていた。お医者いしやの帰つた時には、八っちゃんは泣き  
づかれにつかれてよく寝てしまつた。

お母さんはそのそばにじつと坐すわつていた。八っちゃんは時々怖こわい夢でも見ると見えて、  
急に泣き出したりした。

その晩は僕は婆やと寝た。そしてお母さんは八っちゃんのそばに寝なすつた。婆やが時

々起きて八つちゃんの方に行くので、折角眠りかけた僕は幾度も眼をさました。八つちゃんがどんなになつたかと思うと、僕は本当に淋しく悲しかった。

時計が九つ打つても僕は寝られなかつた。寝られないなあと思つている中に、ふつと気が附いたらもう朝になつていた。いつの間に寝てしまつたんだろう。

「兄さん眼がさめて」

そういうやさしい声が僕の耳許でした。お母さんの声を聞くと僕の体はあたたかになる。僕は眼をぱっちり開いて嬉しくつて、思わず臥がえりをうつて声のする方に向いた。そこにお母さんがちゃんと着がえをして、頭を綺麗に結つて、にこにこして僕を見詰めていらした。

「およろこび、八つちゃんがね、すっかりよくなつてよ。夜中にお通じがあつたから基石が出て来たのよ。……でも本当に怖いから、これから兄さんも基石だけはおもちゃにしないで頂戴ね。兄さん……八つちゃんが悪かつた時、兄さんは泣いていたのね。もう泣かないでもいいことになつたのよ。今日こそあなたがたに一番すきなお菓子をあげましょうね。さ、お起き」

といつて僕の両脇に手を入れて、抱き起そうとなさつた。僕は擦つたくつてたまらない

から、大きな声を出してあははあははと笑った。

「八っちゃんが眼をさしますよ、そんな大きな声をするよ」

と喋ってお母さんはちよつと真面目な顔をなさったが、すぐそのあとからにこにこして僕の寝間着を着かえさせて下さった。



# 青空文庫情報

底本：「一房の葡萄 他四篇」岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年12月16日改版第1刷発行

底本の親本：「一房の葡萄」叢文閣

1922（大正11）年6月

入力：鈴木厚司

校正：地田尚

2000年10月18日公開

2005年11月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 碁石を呑んだ八っちゃん

有島武郎

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>